

側妃志願！
3

陛下

ロズシェイン王国の国王。
二重人格で、常に
鉄仮面を被っている。アイダは
明るい方の人格を「陽の陛下」、
冷たい方の人格を「陰の陛下」
と呼んでいる。

エレイン

ロズシェイン王国の王妃。
子どもが出来ないことに悩み、
アイダに「世継ぎを
産んでほしい」と頼む。

ウィルフリート

神出鬼没の謎めいた青年。
以前アイダが働いていた宮に
滞在していた。どうやら陛下の
命令で動いているらしいが、
その正体とは――？

サラージャ

国王の側妃で、通称「白妃」。
不思議な力があり、
各人が持つ「色」を
見ることができる。

シェルドガー

王宮の騎士。
陛下の信頼が厚く、
ウィルフリートとも親しい
関係にあるらしい。

フィンティ

国王の側妃で、通称「赤妃」。
派手で勝ち気なお嬢様だが、
本当は優しい性格をしている。

社長さん

ふてぶてしい顔をした
オッドアイの白猫。
アイダの部屋で
飼われている。

アイダ(合田清香)

異世界にトリップした元フリーター。
きれい好きで掃除が趣味。
専用のお風呂が欲しくて
国王の側妃になったが、
ウィルフリートのことが好き。

目次

第一章	陛下との初めての夜が明けました	7
第二章	陛下の正体を知ってしまいました	68
第三章	最後の賭けに出ることにしました	126
第四章	誕生祭が執り行われました	181
最終章	それぞれの幸せを選び取りました	230
番外編	導かれた運命	272

第一章 陛下との初めての夜が明けました

「ぶすーっ、ぶすーっ」

私——アイーダこと合田清香は、白猫の社長の寢息で目が覚めた。社長さんはデ……いや、貫禄のある身体をしているので、寝ると高確率でイビキをかく。右目が青、左目が黄色という美しいオッドアイをしているのに、目が細いせいで非常に分かりにくい。

「社長さん、うるさいですよ。静かにしてくださいよ」

寝ぼけ眼のまま手探りで社長さんを探していたら、その手が毛皮ではなく何か硬いものに触れた。何だろう、これ。ベルベットに似た、極上の触り心地だ。

手触りが良いのでしばらくさすさすと撫でていると、不機嫌そうな低い声が耳に飛び込んできた。
「……触るな」

慌てて目を開けたら、すぐ横にこのロズシェイン王国の国王——陰の陛下が寝ていた。

彼の側妃である私が彼をこっそり“陰の陛下”と呼んでいるのには理由がある。彼は何と二重人格者なのだ。その二つの人格があまりにもかけ離れているので、朗らかな方を“陽の陛下”、冷酷な方を“陰の陛下”と呼び分けている。

そういえば、昨夜は陰の陛下が私の部屋に初めて泊まったのだった。と言っても、結局私たちの間には何もなかったけれど。

陛下がいることをすっかり忘れていた私は、仮面と衣装を身につけたまま寝ている彼の腕をずつと撫でていたようだ。それに気付いた瞬間、危うく心臓が止まるかと思った。むしろ、止まるなら早く止まってくれとさえ思った。

「へ、陛下、申し訳ございませんっ！……うわっ、あ痛たたっ！」

頭を下げようと思つて飛び起きたら、バランスを崩してベッドから転がり落ちてしまった。そのはずみで、ベッドの上にあつたクッションがいくつか床に落ちる。

腰をしたたかに打ち、とても痛い。

「……もう良い」

幸い陛下は呆れているのか、何のお咎めもなかった。

腰をさすりながらベッドの上を見ると、社長さんが陛下に寄り添うように寝転んでいた。きつと私より陛下の方が体温が高いからだろう。どうりで寒いと思つた。

社長さん、裏切りましたね。私が風邪を引いたら社長さんのせいですからね。

私は恨みのこもつた目で見なければ、社長さんはどこ吹く風といった感じでのんきに欠伸あくびをしている。

陛下が社長さんをどかそうと手で邪険に払うと、遊んでもらっていると勘違いしたのか、社長さんはその手にじゃれついた。そればかりか、その手を四本の足で掴み、甘噛みし始める。

ひいひいひいひい、社長さん、あなた殺されますよ！ 今あなたが噛みついてるのはいつもの優しい陛下じゃなく、魔王様より怖い陛下なのですよ……！

私が内心震え上がっていると、陛下は社長さんを振り払い、甘噛みされた手をベッドカバーで拭いた。それを忌々いさましそうに丸めて、ベッドの下に投げ捨てる。

はい、そのベッドカバーはすぐに洗濯させていただきます！

ベッドから起き上がった陛下は、朝食も取らずに執務室へ向かうと言つた。こんな格好で寝たんじゃない取れなかつただろうに。いや、むしろ寝たのかどうかさえ不明だ。更に言えば、何で今日に限つて朝までここにいたんだろう。

枕元に置いていた剣を腰はに佩き、寢室を出て行く陛下を、私は慌はてて追いかける。そしてハンガーに掛けてあつた陛下のマントを差し出しながら尋ねた。

「陛下、次はいつお越しに……」

「気が向いたら、また来る」

つまり、気が向かなければ一生来ないということか。

「……お待ちしております」

私が社交辞令的なお辞儀をすると、陛下は羽織はつたマントをばさりと翻ひるかえして部屋を後にした。

陛下だの側妃だのと言っているけど、私はれっきとした日本人である。人よりちよつときれい好きな十八歳だ。両親に先立たれ、お世話になつていた親戚の家を高校卒業と共に飛び出した私は、

掃除という特技を生かして清掃の仕事をしていた。

そんなある日、いつものように派遣先で掃除を終えた私は、洒落た大鏡を見つけた。それが曇っているのを見逃せずに拭こうとしたら、何とそのまま鏡の中に吸い込まれてしまったのだ。

目が覚めると、そこは中世ヨーロッパ風の異世界だった。行くあてのない私は、星見亭という宿屋兼食堂を営む夫婦に出会い、住み込みで働かせてもらうことになる。

星見亭での生活は快適だったが、一つだけ困ったことがあった。この世界では、庶民の家にお風呂がないのだ。私は我慢できずに、専用のお風呂目当てで国王の側妃に立候補した。ちなみに側妃とは、国王の第二夫人のことである。

一度は国王に追い払われたり、清掃女中になって王宮で働いたりといった紆余曲折を経たものの、無事に側妃になることが出来た。

だが、それからも問題は山積みだった。国王は二重人格者の上に仮面を被っているし、王妃様からは自分の代わりにお世継ぎを産んで欲しいと頼まれるし、他の側妃たちは一癖も二癖もある人たちだし、^{こづもり}「闇の蝙蝠」という盗賊団に誘拐されそうになるし……

とにかく、この世界に来てからの約五ヶ月間は、慌ただしく過ぎていったのだった。

「あらまあ、昨夜はずいぶん激しかったみたいねえ」

寝室に入ってきた侍女のソフィアさんが、感嘆の声をあげた。ソフィアさんも元は私と同じ清掃女中で、当時から親切にしてくれている優しい女性だ。

「激しい？」

ソフィアさんの視線を辿って室内を見回すと、ベッドカバーやらクッションやら色んなものが部屋中に散らばっている。

「これは、お世継ぎの誕生も近いかもしれないわね」

アステイさんが満足げに頷く。彼女は私の元上司で、今はソフィアさん、エルさんと三人で私の侍女をしてくれている。そして私にとっては、厳しい行儀作法の師匠でもあるのだ。

「きゃあ、私には刺激が強いですっ」

エルさんはそう言って手で顔を隠す。が、指の間からは二つの大きな目が覗いており、隅から隅までしっかりと観察していた。彼女は私たちの中で一番若く、とても好奇心が強い。

「違います。えーと、社長さんが暴れたんです」

私が慌てて嘘をつくとき、背後で社長さんがのそりと立ち上がる気配がした。彼は人間並みに賢いので、自分のせいにされたと分かったんだろう。

後で朝食を分けてあげますから……そう目配せすると私の気持ちが通じたのか、社長さんはゆっくりとしゃがんでまた寝そべった。

社長さんの無言の圧力によって朝食のほとんどを奪われた私は、いつものように茶色のかつらで変装して仕事へ向かった。「側妃が働くなど前代未聞だ」と皆に反対されたのだけれど、趣味の掃除をしないでいるのは私の精神衛生上良くないので、長い前髪で顔を隠して掃除をしているのだ。

それに、衣装や宝石などの装飾品は腐るほど持っているものの、側妃はお給料が出ない。老後の生活は保障してもらえないそうだけど、これから先何があるか分からないし、将来のために少しでも稼いでおきたかった。

まず私は回廊へ向かった。私たち王族が暮らす宮殿の内側にあるこの回廊は、柱に細やかな彫刻が彫られており、一見の価値がある。

一時期より気温は多少上がったものの、まだまだ肌寒く、吐く息は白い。私は身体を温めるためにも、一心不乱に仕事に励むことにした。

「さあ始めるぞ」と腕まくりをしたところで、ふと周囲を見回した。

ここ二三日、誰かの視線を感じるのだ。気のせいだとは思っけど、少し落ち着かない。

もしかしたら、ウィルフリートさんがどこかに隠れて私を見ているんじゃないか——などと想像をしては、そんな訳ないと打ち消していた。

ウィルフリートさんというのは私の想い人で、元々は星見亭の宿泊客だった。夜中に血だらけで帰ってきたり、私が王宮へ来た後も深夜の庭で出くわしたりと、神出鬼没の謎の人物だ。もしかして盗賊の一味なのではないかと疑ったこともあるし、一度はこの気持ちを封印しようとしたこともある。だけど先日誘拐事件の時に彼が陛下の部下であることを知り、自分の気持ちをどうやっても変えられないことも思い知った。

とはいえ、私は側妃の身。陛下以外の男性を想うことなど許されない。だから私は決心した。誰にも内緒でウィルフリートさんを想い続けていくことを。そのせいで、昨夜は陛下を受け入れるこ

とが出来なかったのだ——

掃除に熱中し、軽く汗ばんできた頃。回廊の床を磨き終わった私は、画廊へ移動した。画廊は回廊をぐるりと囲むように作られていて、たくさんのお宝が展示されている。

その入り口に立つ警備兵さんに会釈をしていたら、階段の方が俄かにざわついた。きっと陛下が王妃様、もしくは側妃の誰かが階段を下りてきたのだろう。

私は素早く廊下の隅に移動して、頭を下げた。誰だか分からないけれど、身分が上の人が通り過ぎるまで動いてはいけないというのが、王宮のルールである。

「あら、あなた……」

女性の声がかから降ってきて、私はピクリと反応した。この声は王妃様だ。

「お顔を上げてくださらない？」

やっぱりそうきましたか。私がゆっくり顔を上げると、変装しているにもかかわらず、王妃様には私が誰だか分かったようだった。いや、おそらく声をかける前から分かっていたのだろう。私が清掃女中の仕事を続けていることはご存じのはずだし。

王妃様は悪戯いたづらつ子みたいな顔をして、更に話しかけてくる。

「朝からご苦労様。名前は何とおっしゃるの？」

「アイリス、と申します」

アイリスというのは、私が女中の仕事をする時の偽名だ。

「そう、アイリスさんね。またいつかお会いしましょう」

王妃様は嬉しそうに微笑んで去っていった。

王妃様はストロベリープロンドの波打つ髪と雫色の瞳をもつ、儂げな美女だ。彼女は私が清掃女中をしていた頃から優しく接してくださり、私が側妃候補だと知ると、「陛下の側妃になつて欲しい」と懇願なさつたのだ。「自分にはお世継ぎが産めないから、自分の代わりに産んで欲しい」とも。

私はそれを引き受ける代わりに、彼女と三つの約束をした。一つ、側妃になつても掃除の仕事を続けさせてもらうこと。二つ、私がお世継ぎを産んだら、その子供は王妃様が育てること。三つ、私は陛下を決して好きにはならないこと。

こうして私は王妃様のため、そして自分の「毎日お風呂に入りたい」という願望を叶えるために側妃になつたのだ。

そんなことを思い出していたら、続いて陛下が現れた。

「精が出るね。頑張つてね」

今朝とは雰囲気は全く違う。あの後、人格が交代したのだろう。陽の陛下は明るく朗らかで、私と仲がいい。

陽の陛下は私の変装に気付いた様子がなく、他の使用人にも声をかけて回っている。どうやら今日は王妃様と二人で出掛けるみたいだ。

側妃を迎えて以来、陛下は王妃様と夜を共にすることを禁じられている。一刻も早く側妃たちの

誰かにお世継ぎを産ませるためだ。だから、たとえ公務であっても、一緒にお出掛けするのが嬉しくて仕方がないのだろう。見るからに上機嫌だ。

陽の陛下は王妃様に夢中で、側妃たちとは身体の関係を持ちたくないと言っている。だから私は陽の陛下と添い寝はしても、それ以上のことはしていない。

だけど、陰の陛下とは今後どうなるか分からない。昨夜は何か事なきを得たものの、いつかはそういう関係になるかもしれない……。ああ、でも陰の陛下には私の偽乳がバレてしまったから、もう二度と私のところには来ないかもしれない……

幸せそうな二人を見送つた後、私は画廊に入った。そしていかにも高そうな芸術品の一つ一つを丁寧に拭い、床に敷き詰められた絨毯をきれいにしていく。この部屋にあるものを一つでも壊そうものなら、一生働いても返せないほどの借金を背負ってしまいそうなので、私は慎重に掃除を進めた。

掃除をしていれば余計なことを考えずに済む。そう思つて集中したおかげか、今日の掃除はいつも以上に捗つた。

部屋に戻ると、アステイさんが一つの封筒を手渡してきた。裏面には赤い封蝋が施されている。

「赤妃様からよ。お茶会のお誘いですって」

「フィンディさんから？」

フィンディさんはアローガネス伯爵家の令嬢で、三人の側妃のうちの一人だ。赤い巻き毛と緑の

瞳を持つ派手な美人で、「赤妃」と呼ばれている。ちなみに私は髪が黒いので、「黒妃」と呼ばれていた。

私はアステイさんから受け取ったペーパーナイフで封筒を開け、中に入っていた招待状を読んだ。ずいぶんと急な話だが、お茶会は今日の午後に行われるらしい。

「この宮殿で暮らす女性同士の親睦会なので、侍女の方も一緒にご参加ください、どうぞです」

「あら、ほんと？」

「わーい、楽しみですつ。きつと美味しいお菓子がいっぱい出ますよ」

ソフィアさんとエルさんがはしゃいだ声を出す。侍女も参加していいとは、変わった趣向のお茶会だ。でも、フィンデイさんの気持ちは何となく分かる。

フィンデイさんにはブリジットさんという侍女がいた。けれど、実はブリジットさんの正体は「闇の蝙蝠」という盗賊団のメンバーだったのだ。彼女は投獄された仲間の解放と、この城にあると噂される幻の宝玉——「至上の宝玉」を狙っていた。

それまで、侍女とは自分の命令を聞くためだけに存在するものと思っていたフィンデイさんは、突然の裏切りに見る影もないほど落ち込んでいた。そして私と侍女三人組の親しげな様子を見て、自分も侍女たちと信頼関係を築く必要があると考えたようなのだ。

今回のお茶会も、侍女たちを労う目的があるのかもしれない。

「女子会ってやつですね」

「女子会？」

私の言葉に首を傾げる三人に、簡単な説明をしてあげた。

「女性だけでわいわいと楽しむ会のことです」

私は友達がいなかったので参加したことはないけれど、高校の時はよく女子会というものが行われていた。皆でカラオケに行ったり、パンケーキを食べに行ったりするらしい。

初めての女子会に、私は少々浮き足立っていた。だけど生まれつき無表情なせいで、誰にも気付かれていない。

そして午後になり、私は清楚な昼用のドレスに着替えた。侍女三人組もいつもよりおめかししている。

「そろそろ行きましょうか」

「ええ、そうね。楽しみだわ」

「お腹の方も準備出来てます！」

私たちは足取り軽く、女子会へと繰り出した。会場はフィンデイさんの自室だ。

他の側妃の部屋は同じ二階にあるので、長い廊下をしばらく歩けばフィンデイさんの部屋に着く。アステイさんがノックをすると、フィンデイさんの侍女さんが扉を開けてくれた。

「ようこそおいでくださいま——」

「お待ちしておりましたわ！ 黒妃様」

侍女さんの言葉を遮るように、奥の方からフィンデイさんの声が届く。そちらを見れば、相変わ

らずゴージャスな部屋と赤妃様の姿があった。

今日のフィンディさんはトレードマークである赤髪を結い上げていて、まるでマリー・アントワネットみたいに見える。今日はお茶会の主人役なので、いつもより気合が入っているようだ。

「お招きいただきありがとうございます」

そう言ってお辞儀をすると、「そんな堅苦しい挨拶は結構ですから、早くお座りになって」と急かされ、豪華な椅子に座らされた。

「お先にいただいておるぞ」

向かいに座っていたのは、もう一人の側妃サラージャアさんだ。自分の侍女さんたちと一緒に、優雅にお茶を飲んでいる。サラージャアさんはハルベルダム侯爵家のご令嬢で、白く長い髪から「白妃」と呼ばれる、神秘的で美しい女性である。こちらはいつもと変わらないゴシック風の衣装だ。

侍女三人組も私の席の後ろに設えられたソファーに座った。招待されることに慣れていないせいか、やや緊張しているみたいだ。

フィンディさんの侍女さんたちも、皆にお茶を配り終わると空いた席に着いた。

テーブルには軽食やパステルカラーのケーキが所狭しと並べられている。とてもカラフルで、一足早く春が訪れたみたいに華やかだ。

「どうぞ、お召し上がりになって」

「はい、いただきます」

私はフィンディさんのお言葉に甘え、ピンク色のカップケーキを一口食べた。おお、すごく甘

い。生地も甘いけど、上からかけられたアイシングは更に甘い。まるで砂糖を丸かじりしているようだ。後ろを見ると、エルさんが満面の笑みでこれまた甘ったるそうなケーキを頬張っている。

早々に音上げた私は、カップケーキをお皿の端に寄せ、フルーツを取って食べていた。するとサラージャアさんが目敏く指摘する。

「黒妃よ。そなたはなぜ果物ばかり食べておるのじゃ？」

「お、お気になさらず……」

私はそう言ってお詫言わそうとしたのだけど、フィンディさんが表情を曇らせてしまった。

「お口に合いませんか？」

「いえ、とっても美味しいです。ただ、私は果物が大好物でして……」

しどろもどろになっている私を見かねて、サラージャアさんが助け舟を出してくれた。

「だから黒妃は痩せておるのじゃな。赤妃よ、そなたこそ果物を食べるべきではないか？ 菓子ばかり食べていると、みっともないほどに肥えてしまうぞ？」

「まあ、失礼な方ねっ！」

フィンディさんの顔が、その髪と同じく真っ赤に染まった。フィンディさんは太っている訳ではないけれど、胸がとても大きいので、少しふくよかに見えてしまうのだ。きつと食べた栄養が全部胸にいつているのだろう。実にうらやましい。私は自分の詰め物をした偽乳を残念な気持ちで見下ろした。

フィンディさんはぷりぷりと怒ってサラージャアさんと喧嘩をしていたけれど、このままでは埒が



明かないと思ったのか、私に話を振ってきた。

「そういえば、来月末は黒妃様の誕生日ですわね」

「あ、はい」

そう、来月には私の誕生日がある。だけど、本当にその日が私の誕生日なのかどうかは怪しい。一年が三百六十五日あるのも閏年うるふとしがあるのも日本と同じだけれど、月ごとの日数は日本の暦こよみと違う。おまけに月の数字が三ヶ月ほどずれていて、日本では三月三十一日であるはずの私の誕生日が、ここでは十二月三十一日になっているのだ。

「衣装はもう決まっていらいっしやるの？」

「はい。ただ今、仕立屋さんが大急ぎで作成中です」

「素敵！ きつと豪華うつくしな衣装なのでしょうね。楽しみだわ！」

「いえ、あまり派手ではないものを……と願っています」

本当は前に陛下にもらった衣装を着る予定なのだが、それは言わないでおく。行事の度に衣装を新調するのは、どうしても国庫の無駄遣いに思えてしまうのだ。陛下にもらったのはいいもの、まだお披露目していない衣装がたくさんあるので、これと決めたものを仕立屋さんに手直ししてもらっている最中だった。

「でも、黒妃様は主役ですよ!? 主役が着飾らないでどうするのです!」

フィンディさんは立ち上がり、私の侍女さんたちをキツにと睨にらんだ。そしてリーダー格であるアスティさんに命じる。

「ちよつと、あなた！ 衣装をもつと派手派手しくするよう、今すぐ仕立屋に連絡しなさい！ ……いえ、してちょうだい！」

興奮していても、命令口調からお願ひ口調に変えたところは立派だった。

アステイさんがこちらを見たので、私は必死に首を横に振った。するとアステイさんは立ち上がり、深くお辞儀をする。

「申し訳ございません。私は黒妃様付きの侍女ですので、赤妃様のご命令には従いかねます」

「んまあっ！」

フィンデイさんは眉をつり上げ、ふわふわした扇で口元を覆った。サラージアさんは貴族のご令嬢らしからぬ笑い声をあげてテーブルを叩いている。

「ひやつひやつひゃ。そなたの負けじゃ、赤妃よ。侍女はかくあるべきじゃからの。あまり我儘が過ぎると、また自らの侍女に愛想を尽かされるぞ？」

「何ですって!？」

サラージアさんの度重なる無礼な発言に、フィンデイさんの怒りは沸騰寸前だ。それぞれの侍女さんたちは間に挟まれてオロオロしている。

でも、これはいつものことなので、深刻な状況ではない。

「止めた方がいいんですかね？」

私もすでに見慣れてしまい、もはや二人の諍いに様式美さえ見出しているのだけれど、一応アステイさんたちに聞いてみた。

「あれはあれで楽しそうだから、放っておきましょう」

「喧嘩するほど仲がいいってことよ」

「アイーダさん、この余っているお菓子、もらって帰ってもいいですか？」

私の侍女三人組も、こんな風に平常運転だ。他の侍女さんたちも次第に落ち着きを取り戻し、和気あいあいとした雰囲気になる。

初めての女子会は大いに盛り上がり、すぐに第二回の開催が決まった。



翌朝も、私は回廊を掃除していた。すると、そこへ突然、箒を持った小柄な少女が現れる。私は驚いて彼女の名前を呼んだ。

「リジイさん！ どうしてここに？」

彼女は清掃女中時代の後輩で、入ってきた当初は全く仕事をしてくれない問題児だった。だけど、熱を出して倒れた私を看病してくれたことがきっかけで仲良くなり、今では私の仕事を引き継いでくれている。

「新しい箒を持っていけって命令されてさ。誰かさんが毎日念入りに掃除するもんだから、毛先の摩耗が激しいんだって？」

私は自分が持っている箒を見下ろした。確かに使い始めた時に比べると、毛先がだいぶ減ってし

まっている。

「す、すみません。わざわざありがとうございます」

私がお礼を言うと、リジイさんは思い出したように言った。

「そういえば、来月のあんたの誕生日に、私も出ることになったよ」

「じゃあ、リジイさんもドレスを着るんですか？」

「まあね。ドレスもダンスも嫌だつて言ってるのに、このところ休みの度にオヤジの回し者が来てさ、ドレスを試着しろだのダンスレッスンしろだのうるさく言ってくるんだよ」

私は同情を込めてリジイさんの手を握り、何度も頷いた。

「その気持ち、すごくよく分かります……！」

「でしょ？ 平民出のあんたなら分かってくれると思つたよ。それにしても、まさか掏摸スリや置き引きをしてた私が王宮のパーティーに出るなんてね。今でもロレアの仲間たちは貧しい生活を送っているとと思うと、何だか複雑な気分だよ」

リジイさんは私の手を振り払いながら、大きな溜め息をついた。

彼女は貧民街であるロレアの出身だ。幼い頃に唯一の肉親であるお母さんを亡くし、同じような境遇の子供たちと徒党を組んで、色々と悪事を働いていたそうだ。ところが、そんな彼女の父親は何と男爵様だったのだ。年を取ってからリジイさんのことを思い出した男爵様は、彼女を引き取り、行儀見習いとして王宮に入れたと聞いている。

「ま、ダンスなんて踊るつもりはないけど、ご馳走ちそうが出るっていうから出席することにしたよ。あ

んたもせいぜい頑張んな。主役がダンスの途中で転んだら、後世までの語り草になるだろうからね！」

リジイさんはニヤリと笑うと、女中服のスカートを翻ひるがえして去っていった。

その後の姿を見ながら、私は考える。

日本にいた時も、公園などでホームレスの人を見かけることはあった。気の毒だなと思つてはいたけれど、私にはどうすることも出来なかつたし、どうにかしようとも思つていなかった。

だけど、ここでは違う。また何の力もない私だけど、自分だけでいえば陛下や王妃様に次ぐ地位にあるのだ。このロズシェイン王国で貧しい暮らしをしている人々のために、何か私に出来ることはないのだろうか……

リジイさんがくれた新品の箒ほうきを見つめながら考えたけれど、具体的な案は何も浮かばなかつた。とりあえずダンスの練習だけは、死に物狂いでやっておこう。そう心に誓い、私は掃除を再開した。

その日の午後、私は自室で馬車の準備が整うのを待っていた。これから以前も招かれたことのある、トロワリー伯爵夫人のお茶会に参加する予定なのだ。

「陛下の命いのちにより、以後、黒妃様の身辺警護を務めさせていただきます」

そんな言葉と共に折り目正しく礼をしたのは、騎士のシエルドガーさんだった。身体つきががっしりとした、三白眼さんぱくがんの男性である。

「シエルドガーさんが、なぜ私の警護を？」

陛下の信頼も厚い彼が、陛下のもとを離れて私の警護をするなんて、一体何があったのだろう。

先月、私は「闇の蝙蝠」のメンバーだったラーセルホークという人に誘拐された。それ以来、王宮の警備は嚴重になり、外出の際にもたくさんさんの護衛がついてくる。とはいえシエルドガーさんまで私の警護に加わるのは、いささか過剰だと思えた。

「黒妃様は、陛下の大事なお方ですので」

シエルドガーさんは、そう言つて柔らかに微笑んだ。

……ますます怪しい。確かに世間では寵妃と思われているけれど、実態は全く違う。そんな私にシエルドガーさんを付けるとなると、陛下には何か別の目的があるに違いない。

「黒妃様、馬車の準備が出来ました」

「ありがとうございます、すぐに参ります」

使用人さんの報告を聞いて、私は立ち上がった。陛下の思惑は不明だけど、とりあえず今は出掛けなければならない。

私がアステイさんに手を引かれて部屋を出ると、シエルドガーさんは黙つてその後続いた。

馬車には私とアステイさんだけが乗り、シエルドガーさんは馬に乗つて並走する。

発車してしばらくすると、アステイさんが軽く眉をひそめた。

「少し早く出すぎたわね」

「そうなんですか？」

「思ったより道が空いていたのよ。あまり早く着くと、先方に迷惑を掛けてしまうかもしれないわ」

アステイさんは御者さんに、「ゆつくり進んでちょうだい」と命じた。急にスピードが落ちたのを不思議に思ったのか、シエルドガーさんが馬に乗つたまま近付いてきた。

「どうかなさいましたか？」

そう尋ねる彼に、アステイさんが事情を説明する。すると、シエルドガーさんはある提案をした。

「では、寄り道でもなさいませんか。この先に景色の良い公園がございます。小さいですが、湖もありますよ」

「いいですね。行つてみたいです」

私はシエルドガーさんの提案に賛成した。寄り道……何て素敵な響きだろう。

危険ですと言つて難色を示すアステイさんだったが、王妃様もたまに訪れるというシエルドガーさんの言葉を聞いて、しぶしぶ了承してくれた。

やがて辿り着いたのは、周りを木々に囲まれた、のどかな雰囲気を持つ公園だった。中央に湖があつて、そこにはアーチ状の橋が架けられている。所々に緑が芽吹いていて、春の訪れを予感させた。

アステイさんから日傘を受け取り、シエルドガーさんに誘導されて、湖のほとりまで歩く。舗装されていない土の上を歩くのはとても気持ち良くて、空気が美味しく感じられた。もつと暖かくなつたらお弁当を持ってピクニックをしに来たいくらいだ。

「橋を渡ってもいいですか？」

「もちろんです」

シエルドガーさんに許可を取ってから、橋の上をゆっくりと歩いた。橋の中央が丸く広くなっていたので、そこから公園を見渡し、深呼吸をする。

「とっても素敵なお場所ですね」

「はい。最近の黒妃様は物思いに沈んでいらつしやるご様子でしたので、差し出がましいこととは思いましたが、少しでも気分転換になればと」

「……ありがとうございます」

心配させて申し訳ないと思いつつも、気を遣ってもらえたことがとても嬉しかった。

でも、どうして気付かれたんだろう？ 彼とはあまり会う機会がなかったというのに。もしかして、最近感じていた誰かの視線は気のせいではなく、彼のものだったのだろうか。

「王宮は黒妃様にとつて、お辛い場所でしょうか？」

考え込んでいた私は、そのシエルドガーさんの言葉で我に返る。

実は、シエルドガーさんはちよつと苦手だった。陰の陛下ほどではないけれど、こういう風に、時折核、心を突いてくるからだ。

「多少の不自由はありますが、満足しています」

「では王宮ではなく、陛下とのご関係に問題が？」

シエルドガーさんは更に踏み込んできた。

ここでの私の発言は、陛下の耳に入るのだろうか。

「……」

少し逡巡した後、それでもいいと思った。これ以上何を言っても、私の評価が下がることはないだろう。すでに陰の陛下の中で、私の評価は最低なのだから。

「明るい方の陛下とは、うまくやっていると思います。だけど、もう一方の陛下は……優しくないです」

「優しくない？」

どう言えばちゃんと伝わるのかを考えながら、私は再び口を開く。

「陛下は何が気に入らないのか、いつも威圧的で、苛立っているみたいに見えます。それに……陛下の言葉は私を傷付けます」

私は少し俯き、そのまま沈黙が訪れる。

すると、水面を優雅に漂っていた水鳥たちが一斉に飛び立った。その音に驚き顔を上げた私は、頭上を通り過ぎる鳥たちを眺める。

平和だなあと思つて何だか気が抜けたところで、同じく空を仰ぎ見ていたシエルドガーさんがぼつりと漏らした。

「陛下がよく笑う明るい子供だったと言つたら、驚かれますか？」

その言葉に意表を突かれて、私は息を呑んだ。シエルドガーさんが、そんな私の目を真っ直ぐに見つめる。

陽の人格の時なら、陛下はそれなりに笑う。だけど、その笑顔にはどこか影があった。陰の陛下はごくまれに笑ったとしても、せいぜい唇の端を歪めるくらいだ。

どちらの人格にしても、明るくてよく笑うというイメージからは程遠かった。

「それは……驚きますね」

「そうですね。かく言う私も、自分の記憶違いなのではないかと思うくらいですから」

無言でその顔を見つめる私に、シエルドガーさんは言った。

「私の名はシエルドガー・ディケンス。ディケンス辺境伯と言えばお分かりになるでしょうか？」

「もしかして、陛下が幼い頃に引き取られたという、あの？」

シエルドガーさんは静かに頷く。

辺境伯はこの国において、公爵にも匹敵するほどの地位だ。騎士のほとんどが貴族出身なのは知っていたけれど、まさかシエルドガーさんがそんなに位の高い貴族だったとは。

「今は歳の離れた兄が家督を継いでおりますが、前の当主である父が、赤子だった陛下をお預かりしたのです」

私は陽の陛下が語ってくれた話を思い出していた。自然が豊富な領地で伸び伸びと育ち、そこで兄のような存在の人に出会ったと。それはもしかしたらシエルドガーさんのことだったのかもしれない。

一定の距離を保っていたシエルドガーさんが、一歩近づいてきた。

「……昔話をお聞きくださいますか？」

シエルドガーさんの問いに、私は戸惑いながらも頷く。すると、彼は意を決したように語り始めた。

——陛下が我が領地にやってきたのは、私が四歳の頃のことでした。

旅の供は乳母と、一人の老いた護衛のみ。そのご身分からは到底考えられないことです。

真っ白なおくるみに包まれた陛下は、当たり前ですがとても小さく、そしてとても温かく……私が指を差し出すと、ぎゅっと握りしめてくださいました。私にはその幼子が不吉な存在だとは、全く思えませんでした。

父はその天使のような赤子がハーデュアルという名で、今日から私の弟になると言ったのです。

そしてよく面倒を見なさいと私に命じました。

私が『ハデイ、初めまして』と挨拶すると、陛下は真に可愛らしい声をあげられました。私の指を口に含もうとする陛下を見つめながら、私はこのお方を守るために生きていこうと決意したのです。何があっても、私だけは陛下の味方でいようと。

……少し話が逸れてしまいましたね。申し訳ございません。

黒妃様は、我が国で双子が不吉だとされている原因をご存じですか？ ……いえ、知らなくても当然です。歴史書にも詳しくは記載されていないはずですから。

初代王であるロズワイル王には双子の弟がおりました。名をシェインネルといい、ロズシェインという国名は二人の名を合わせたものだそうです。ロズワイルが人心を掌握することや統率力に

優れている一方、シェインネルは知略に優れ、宰相として兄王を支えていたといえます。二人は仲の良い兄弟でした……弟であるシェインネルが謀反を起こすまでは。

彼がなぜ謀反を起こしたのかは分かっておりませんが、国は国王派と宰相派の二つに分かれて何年も争い続け、亡国の危機に瀕しました。

結果、弟シェインネルの死をもって国王派が勝利を収めたのですが、それ以来、双子の弟は国に仇なす存在として忌み嫌われるようになったのです。特に王家では男の双子が生まれたら、弟の方を秘密裏に処分してきたのだとか。

……酷い話でしょうか？　なのに、国民はそれをおかしいとも思わず受け入れている。そういう慣習だから仕方ないと思っっているのです。一種の社会的洗脳ですね。

なぜ、ほんの小さな赤子が双子の弟であるというだけで、こんな辺境の地に追いやられているのかと、子供心に不思議でなりませんでした。同時に、やるせない思いに悩まされたものです。我が領地で伸び伸びと育った陛下が、その顔に可愛らしい笑みを浮かべた時は、特に。

陛下はとても利発で、普通の子供の何倍も早く知識を吸収しました。また、活発で好奇心旺盛な面もあり、一歩外に出れば常にあちこち走り回っておられました。そのお姿は本当に無邪気で、私は「天真爛漫」という言葉は陛下のためにあるのだと思っていました。

……実は箱口令が敷かれていたので、幼い頃の陛下は自分が何者かを知らないまま育てられました。です。

陛下が真実を知ったのは七歳の頃でした。外交のため他国へ赴くことになった前陛下が、旅の途

中で我が屋敷に滞在することになったのです。その時、父が良い機会だからと、陛下に真実を伝えました。

陛下は大変混乱しておいででした。無理もないことでしょう。今まで家族だと思っていた我々が赤の他人で、国王が実の父だということですから。

『一人になって考えたい』と言ってしばらく自室に籠っておられた陛下ですが、元々の性格ゆえか、次第に明るさを取り戻されました。『僕には父上が二人もいるということだよ。うらやましいだろ？』なんて言って。

そして、その数日後に前陛下がお見えになりました。

しかし……頬を染めて礼儀正しく挨拶をされた陛下に、前陛下は冷たく言い放ったのです。『お前のような者は知らぬ』と。

私たちは前陛下のお心を誤解しておりました。陛下のお命を救われたのは我が子に対する愛情ゆえだと、信じきっていたのです。

——その日から、陛下は変わられてしまいました。

いつも眉を寄せて何事かを考え、他人を遠ざけ、めったに笑わなくなりました。自然を愛し、動物を愛し、人を愛していた陛下は、どこにもいなくなってしまったのです。

陛下が十歳になった頃、兄王子と前王妃が立て続けに亡くなりました。そして、陛下は直ちに王宮に呼び戻されたのです。私は陛下の護衛として共に参りました。

謁見の間で、前陛下は陛下にこう言ったのです。

『おお、ハーデュアル、我が息子よ。会いたかったぞ』と。

——お前のような者は知らぬ、と言ったのと同じ口で。

私は背筋が凍る思いがしました。陛下がどんなお気持ちだったのか、お顔からは読み取れませんでした。想像に難くありませんでした。

そこで前陛下が人払いを命じられ、私も退室したので、その後のことは分かりません。ですが、二人が言い争う声が聞こえたため部屋に飛び込むと、床に伏した前陛下と血だらけの剣を持った陛下が立っていたのです。

陛下の身体には、無数の打撲痕がありました。まるで、誰かに容赦なく蹴ったり殴ったりされたかのような。更には、明らかに剣で斬りつけられた傷までが——

「……」

私は何も言えず、ただ黙ってシエルドガーさんの話を聞いていた。

陽当たりはいいはずなのに、指先がとても冷たくなっている。

お父さんとの間に何があったのかは、今となっては陛下しか知らないことだ。だけど、それは陛下の心を壊してしまうほどの事件だったのかもしれない。

「それからです。陛下が仮面を被り、素顔を隠すようになったのは」

そのシエルドガーさんの言葉で、私は義父のシグルトさんから聞いた話を思い出した。

前陛下は王宮に連れ戻された陛下に、「これからは次期王位継承者としての自覚を持ち、国に、

そして民に仕えよ」と言ったという。

陛下はどんな思いで、その言葉を聞いたんだろう。自分のことを捨てておきながら、必要になった途端に手の平を返した父親の言葉を。

そして陛下は素顔を隠し、感情を隠し、ロズシエンというこの大きな国を今もなお背負い続けている。それは義務？ 責任？ それとも……

……分からない。私になんて、分かるはずもない。ただ一つ分かるのは、陛下にとつて十歳の時の出来事がとても辛いものだったに違いないということだけだ。きっと陽の陛下という、もう一つの人格を作り出してしまうほどに。

「黒妃様にお願いがございます」

俯いていた私は顔を上げ、シエルドガーさんの改まった態度を警戒しつつ応える。

「……何でしょう？」

「陛下をしつかりと見ていただきたいのです」

「しつかりと……？」

思わず聞き返した私に、シエルドガーさんが大きく頷く。

「周囲の噂や上辺の態度に振り回されず、真正面から陛下を見てください。私は黒妃様に、陛下のことを理解していただきたいのです。そして出来ることなら——陛下を愛していただきたいのです」

私が、陛下を愛する……？ そんなの必要ないはずだ。だって……

「陛下には、王妃様がいらつしやいます」

陛下は王妃様を愛している。そして王妃様も陛下を愛している。その王妃様でも癒やせないほど深い傷を、私が癒やせるとは到底思えない。

両親がいけない悲しさや寂しさは分かかってあげられるかもしれないけど、私は陛下みたいに酷い仕打ちをされたことがない。そもそも分かかってあげられる、なんて思い上がりも甚だしいだろう。

シエルドガーさんは目を閉じて、ゆっくりと首を横に振った。

「私が愛していただきたいのは、あなたが『優しくない』と言った方の陛下です。あのお方の心は今もなお空虚なまま。壁を作り、自らを孤独な世界へと追いやっている……ですから、誰かの支えが必要です」

「……とてもそんな風には見えませんが」

陰の陛下は、誰の支えも必要としないんじゃないだろうか。少なくとも、私にはそう見える。陛下が周囲を威圧なさるのは、もう二度と愛した誰かに裏切られ、傷付きたくないからだと思います。本当は、人一倍愛情深い方なのです。だから、どうか陛下を愛していただけませんか。あのお方を孤独の淵から救えるのは、黒妃様だけなのです」

「私では……私では無理です」

同情はする。肉親から酷い仕打ちを受けた陛下は、とても可哀想だと思う。

だけど、同情は愛情ではない。むしろ私が同情したら、陛下は嫌がるんじゃないだろうか。今でさえ疎まれてるのだから。

それに……私には好きな人がいる。

もし陛下と深い関係になったとしても、その人の存在が心の中から消えることはないと思う。決して許される想いじゃないのは分かっているけれど、彼の存在は私の中に根付いてしまっていた。

そんな状況で陛下を愛することなんて、不器用な私に出来るはずもない。

思い悩んでいるうちに、アステイさんが馬車から降りてくるのが見えた。そろそろ出発しなければならぬようだ。

「では黒妃様、参りましょうか」

シエルドガーさんはまるで何事もなかったかのように、馬車の方へと歩き始めた。切り替えが早すぎてついていけない。こっちはまださっきの衝撃が残っているというのに。

それに……私には、シエルドガーさんにどうしても聞きたいことがある。

「待ってください」

「どうかなさいましたか？」

シエルドガーさんが立ち止まり、こちらに振り向く。

「えっと……」

呼び止めておきながら、次の言葉を絞り出すまでにずいぶん時間がかかった。この質問をしてしまったら、とても薄情な女だと思われそうだ。

だけど今日、シエルドガーさんに会った時からずっと聞きたかったのだ。彼の同行を受け入れたのも、これを聞きたかったからに他ならない。

そして私は、ついにその問いを口に出した。

「あの人は、元気なんでしょうか？」

あの人というのは、もちろんウィルフリートさんのことだ。彼は先日高熱を出して倒れ、私が一晩中看病してあげたのである。

本当は「あの後また熱を出してはいないか」と聞きたかった。でも、彼が私の部屋に来たことは内緒なので、元気なのかと尋ねることしか出来なかった。

シエルドガーさんは私が誰のことについて聞いたのか、すぐに分かってくれた。

「ご安心ください、元気ですよ。数日前まで、ある任務のために奔走しておりましたが」

ある任務というのは、脱獄した「闇の蝙蝠」のメンバーを捕まえることだろう。「闇の蝙蝠」に脱獄を許してしまったことが知られると国家の名折れになるからか、噂が広まるのが速い王宮でもその話は一切聞かえてこなかった。

「それで……どうなったんですか？」

「はい。任務は滞りなく遂行されました」

「そうですか、それは良かったです」

私は安堵した。ウィルフリートさんが元気で、更には無事に脱獄囚を捕まえることが出来たと分かった。

今頃は身体を休めていてくれればいいんだけど、それは彼の性格上なさそうだ。彼は自分を痛めつけるように休みなく動き続けている。まるで、その方が楽だとも言うみたいだ。

陛下のことと、ウィルフリートさんのこと。

どちらのことも、何も解決していない。むしろ心配事が更に増えてしまった。お茶会の後、王宮に帰るのが少し億劫になってくる。

私は後ろ髪を引かれる思いで公園を後にした。



それからというもの、シエルドガーさんは私が外出する際には必ず同行した。まるで影のようにそばに控える彼だけれど、影にしては目立ちすぎている。

ある貴族の屋敷に招かれた時は、彼を見たご令嬢方が黄色い悲鳴をあげた。だけどシエルドガーさんには近寄りがない雰囲気があるので、彼女たちは遠巻きに見ているだけ。その代わり、私が質問攻めに遭った。

「彼のお名前は何かとおっしゃるんですの？」

「いつから黒妃様付きに？」

「ご結婚はなさっているのかしら？」

矢継ぎ早に尋ねられて、私は戸惑うばかりだった。

すっかり忘れていたけれど、シエルドガーさんはとても整った顔をしているのだ。凛々しい顔に生真面目そうな表情を浮かべ、終始寡黙な態度を貫いている。そんな彼が少し困った時に見せる優

しい笑顔を、ご令嬢方に見せてあげたいと思ったけれど、その表情が和らぐことはなかった。また別の日には、慈善活動をしているご婦人方に誘われて孤児院を訪れた。

昨今、貴族の間ではそういう施設にお金や物資を寄付し、子供たちの世話をしたり一緒に遊んだりするのが流行っているらしい。流行っているという言葉に少し抵抗を覚えたけれど、良いことには違いないので参加することにしたのだ。

もちろん、シエルドガーさんも同行した。

「ようこそいらつしゃいました！」

声を揃えて挨拶してくれたのは、十歳にも満たない小さな子供ばかりだった。ご婦人方は挨拶を返しながら子供たち全員と握手をしている。けれど、そのうちの数人がこっそり手を拭っているのが目に入った。おまけに手を拭ったハンカチを指でつまんで使用人さんに渡している。

その態度はいかかなものかと思っただけれど、私にそれを咎める勇氣はない。子供たちや孤児院の関係者が目撃していないことを祈るばかりだ。

挨拶が済み、食べ物や洋服を寄付し終えると、子供たちが感謝の歌を歌ってくれた。それから、子供たちが庭で元気に遊んでいるところを皆で見学する。

そうこうしているうちに昼食の時間となり、寄付した食材で作られた食事が、着席した子供たちの前に並べられる。だけど誰一人として手を洗っておらず、食卓にもお手拭きなどは用意されていない。

いつ手を洗うんだろうとやきもきしながら見ていた私は、食事が始まる寸前、我慢できずに声を

あげてしまった。

「待ってください！ 食事を食べる前に、これを！」

「あら、黒妃様。それは何のですの？」

「石鹸でございます、伯爵夫人」

私も何か持っていて言われたので、石鹸の入った木箱を馬車に積めるだけ積んできた。その重い木箱を、申し訳ないと思いつつ御者さんに運び入れてもらい、入り口のそばに置かせてもらっている。その中から一つ取り出し、私は皆に見えるように掲げていた。

「石鹸？ まあ……」

伯爵夫人はそのまま言葉を失ってしまった。けれど、どうしてそんなものを？ と思っているのが顔に出ている。

そんなにおかしいだろうか。多くの人は食べ物や洋服を持つてくると聞いていたから、かぶらない方がいいかと思つて石鹸にしたんだけど。

もちろん、国庫に手を付ける訳にはいかなないので、費用は私が掃除をして稼いだお金から捻出してている。量が量なので結構な出費になってしまったけど、それで子供たちに手洗いがいの習慣が身に付くなら安いものかと思つたのだ。

私が思つた通り、この孤児院では石鹸を使わせていないようで、子供たちが木箱の中を珍しそうに覗き込んでいる。

「食事を取る前や外から帰ってきた時に、この石鹸で手を洗つて欲しいのです。あと、出来たらう

「がいも。そうすれば風邪を引きにくくなりますから」

「はあ……」

孤児院の職員さんたちは困り顔をしている。周囲の貴族さんたちも訝しげな表情だ。

この世界の石鹸にどれほどの殺菌作用があるかは分からないけれど、使わないよりは使った方がマシだろう。何しろ子供たちは土や動物など、バイ菌だらけのものばかり触りたがる生き物なのだ。とりあえず、せっかく黒妃様にいただいたのだからと、職員さんは子供たちに手を洗うよう促した。私が井戸の前で指の間や手首まで洗うやり方を伝授すると、案内子供たちは素直に従ってくれ。遊びの一種だと思っただけかもしれないけれど、大きな進歩だ。

手を洗わせた後は、食事を楽しそうに食べる子供たちの世話をし、最後に全員と握手して別れた。帰り際に大きく手を振ってくれる子供たちを見ながら、私は斜め後ろに立つシエルドガーさんに尋ねる。

「ここにいる子供たちは、将来どうなるのでしょうか」

「そうですね。里親に引き取られる者もいれば、一定の年齢までここで過ごした後、社会へ出て働く者もおります」

もし引き取り手がない場合でも、働き口があるのなら何とかやっつけていけるだろうと思ひ、私は安堵の吐息を漏らした。けれど、次のシエルドガーさんの言葉に打ちのめされる。

「ですが、子供たちがどこかの家に引き取られるとすれば、それは働き手としてです。まだ年端のいかぬ幼子が過酷な労働条件で働かされ、やがて病を患い、そのまま捨て置かれるというケースも

珍しくありません」

「そんな……」

私は仮面舞踏会の日に出会った、花売りの少女のことを思い出した。大したお金にならない花束を道端で一先懸命売り、家計を支える子供のことを。あの時、陽の陛下は「この国の経済を根底から変えなければ意味がない」と言っていた。

私たち王族や貴族が贅沢を貪っている陰で、貧しさに苦しむ人たちがいる。そんな社会の構造は間違っている気がした。

何か、私に出来ることはないのだろうか？ 一時的にではなく、長期的に経済を回復させる秘策はないのだろうか？

「なぜ、石鹸を寄付されたのですか？」

落ち込んでいた私に、シエルドガーさんが尋ねてくる。

「あの子たちに必要なものは何か、自分なりに考えた結果です。もちろん、手を洗ったからといって風邪を引かないという保証はありませんが、予防にはなりますから。出来たら手洗いがいが習慣化してくれればいいんですけど、まだまだ時間がかかりそうです」

「失礼ですが、どこでそんな知識を？ 病の予防法など、あまり一般的な知識ではないと思ひますが」

「えーと……両親からです」

しまった、語りすぎたか。

これ以上聞かれてはまずいと、私は適当に譚魔化して馬車へ乗り込んだ。後頭部に、痛いほどの視線を感じながら。



翌朝、いつものように回廊の掃除をしていると、落ち着いたグリーン系の香水の香りがした。ふと顔を上げれば、宮殿の中からサラージャさんが姿を現す。

「白妃様、おはようございます」

私は急いで回廊の端に寄って、頭を下げた。白妃様は私が女中に変装していることを知っている。だけど、いつ誰に見られるか分からないので、あくまで女中を演じなければならないのだ。

「良い良い、頭を上げるのじゃ。誰も見てはおらぬぞ」

「はあ……」

サラージャさんは顔を上げた私の頭上を、ぴたりと指差した。

「渦を巻いておるな」

「渦？」

つい頭を押さえてしまった私を見て、サラージャさんが可笑しそうに笑う。

「悩みがあるようじゃな。それも、相当に根深い悩みが」

「悩みなんて……」

サラージャさんの言葉を否定しかけて、そんなことをしても無駄だと気付いた。サラージャさんには人の内面を見通す不思議な力があるからだ。

確かに悩みならたくさんある。昨日の孤児院で考えたこともそうだけど、私の頭の中を最も大きく占めているのは陛下の過去についてのことだ。

話していいものか。もし話すとしても、どこまで話していいのか。

サラージャさんは、私の決意が固まるのを静かに待ってくれた。その澄んだ琥珀色の瞳は、もう私の悩みなんて全てお見通しなんじゃないかと思わせる。

だけど、この悩みを自分から口に出すことは絶対に出来ない。サラージャさんを信用していない訳じゃないけど、あまりに重大な秘密が絡んでいるからだ。

そんな私の気持ちを汲み取ったのか、サラージャさんは私から視線を外し、「良い天気じゃなあ」と空を仰ぐ。

その言葉通り、雲一つない青空だ。なのに、悩んで下ばかり見ていたので、ちつとも気付かなかった。

「無理に聞き出そうとは思っておらぬ。じゃが、もし誰かに吐き出したいと思った時は、相手になつてやつても良いぞ。そういった相手がいるのといないのでは、気の持ちようが違うからの」

「白妃様……」

そなたは一人じゃないぞ。そう言われた気がして、胸が温かくなる。

気付けば、私の口から一つの問いが零れ落ちていた。

「白妃様は……幸せですか？」

私の質問に、サラージャアさんは小首を傾げた。絹に似た白い髪がさらりと肩から零れ落ちる。

「また漠然とした問いじゃな」

「そ、そうですよね。ええと、白妃様はここでの生活をどう思っていますか？」

「妾か？ 楽しいぞ。つい先日、我がハルベルダム家が寄付をした博物館の開所式に招かれてのう。非常に興味深い展示物が何点かあったのでな、譲ってくれぬかと交渉しておるところじゃ」

そういう意味で聞いた訳ではないのだけれど、サラージャアさんは本当に楽しそうに見えた。それはもう、うらやましいほどに。

「黒妃はどうなのじゃ？」

「私は……」

そこで一度、口をつぐんだ。

私は幸せなのだろうか。もちろん不幸だと思つたことはない。何不自由ない暮らしを送り、たくさんの仲間たちに囲まれ、側妃としてもそれなりにうまくやっているつもりだ。

だけど――

「……分からないんです。何を悩んでいるのかさえも。こんな自分は初めてで……混乱してるんです」

この世界に来るまでの私は、こんなじゃなかった。誰にも流されず、惑わされず、一人で生きていけるといふ自負があつた。

なのに、今はこんなにも迷っている。真つ直ぐ前を見て突き進むことも出来ず、後戻りすることも出来ず、まるで大海原を漂う小舟みたいに自分の生き方を見失ってしまった。

いつそ全てを投げ出したくなるけれど、逃げる勇氣も逃げ込む場所もない。シグルトさんや星見亭のペリンダさん夫婦を頼ることは出来るけど、相手に多大な迷惑を掛けてしまう。

それに、王妃様を裏切ることも出来ない。あの日の約束は、私の中で絶対的なものになっている。たとえ王妃様の代わりにお世継ぎを産むことは出来なかったとしても、彼女を支えてあげたいと思う気持ちに変わりはない。

そして――何よりも自分自身が、逃げたくないと思つていた。

「心配するな。王妃なら大丈夫じゃ。あれは脆く見えても強い女じゃからの」

私の思考を読み取つたのか、サラージャアさんが言った。

確かに王妃様は、おっとりして見えても芯の強い女性だ。きっと幼い頃から国王の隣に並び立つべく教育されてきたのだろう。

だけれど、そんな彼女があんなにも脆い一面を見せた。あの時は恋する彼女の気持ちが分からなかつたけど、今なら分かる。よく知りもしないウィルフリートさんに惹かれてしまった、今なら。

恋は理屈じゃないんだ。頭ではダメだと分かっているけど、心が追いつかない。

「黒妃よ」

物思いに沈んでいた私は、サラージャアさんに呼びかけられて、はっとした。サラージャアさんの瞳色が私を捕らえている。

「そなたの決心は間違っておらぬ。己の信じた道を進むのじゃ」
「え……？」

サラージアさんは、いつかのウィルフリートさんと同じようなことを言った。

「案ずるな、黒妃なら正しい道を選ぶことが出来るであろう」

「正しい道……」

「自分を、そして相手を信じるのじゃ」

「相手って……？」

「さあ。それは妾の与り知らぬことじゃがの」

サラージアさんは美しい顔に優しい笑みを浮かべ、話は終わったとばかりに踵を返す。私はその後ろ姿をぼんやりと目で追った。

彼女の残り香が消えた頃、どこかで鳥が鳴いて、私は空を見上げた。

確かに今日はいい天気だ。それに、吐く息も白くない。

もう春が近いなあ、なんて思っていた時だった。

視界の端が、きらりと光る。三階の窓だ。

何だろうと思つて目を凝らすと、何かが動いて、そして消えた。

一瞬だったけど、確かにあれは人影だった。誰かがそこにいて、私が見上げたことに気付いて隠れてしまったのだ。

一体誰だろう。あの辺りには陛下の部屋があるけれど、陛下は今頃大臣さんたちと会議中のはず

だ。もちろん、シエルドガーさんでもないだろう。

使用人の誰かかもしれない。そう思うのに、何となく胸がざわめく。だけど、しばらく窓の辺りを見つめていても何の変化もないので、私は諦めて掃除を再開した。

箒で砂埃を掃きながらも、さつき見た光景が頭にこびりついて離れない。

私の見間違いないやなければ、その誰かは——金の髪を持っていた。

その日の午後、私は全身の筋肉痛と戦っていた。

「はい、ワン・ツー・スリー、ワン・ツー・スリー」

アステイさんが手を叩いてリズムを刻む。

「もっと足運びに注意して。三角じゃなくて円を描くようにステップするのよ」

私は今、ダンスのレッスンを受けている。ちなみにお相手はソフィアさんだ。

先月、仮面舞踏会の途中で“闇の蝙蝠”に誘拐されそうになって以来、夜会への招待は全てお断りしている。そのおかげで、最近はダンスの練習とも縁遠くなっていた。

だけど誕生日祭の日は、馬車で王都内を回った後に王宮へ戻り、陛下や貴族の方々々とダンスをしなければならぬのだ。

「今度は腕が下がってきているわよ」

足に注意を向けていたら、腕の方がおろそかになってしまった。少しでも腕が下がろうものなら、棒で容赦なく叩かれてしまう。私は運動が苦手なので、腕か足のどちらか一方にしか集中出来ない

のだ。

ソフィアさんも少し前までは全く踊れなかったはずなのに、今では男性側のパートも踊れるまでになっている。やはり運動神経の差だろうか。

こうなったらもう、とにかく踊って踊りまくって、身体に覚え込ませるしかない。

「誕生日はあなたが主役なのよ。会場中の貴族があなたに注目するのだから、せめてダンスくらいは完璧に仕上げなくては」

アステイさんの目がやる気に燃えている。私は誕生日を祝ってもらおう立場なのに、どうしてこんなに苦労しなければならぬのだろう。

だけど陛下とダンスを踊るのは決定事項だし、陛下の面子^{メンツ}を潰す訳にもいかないので、私は必死にレッスンを受けた。ヒールの高い靴を履いた足が、すでに悲鳴をあげている。

「そろそろ休憩にしたら？」

「私、お茶淹^いれてきますねっ」

ソフィアさんとエルさんが助け舟を出してくれたのに、アステイさんはそれをあつさり^はと撥^はねつけた。

「結構よ。まだまだ大丈夫よね？ アイーダ」

「は、はい」

他にどう返事が出来ようか。私は首をぶんぶん^んと縦に振る。

「ダンスの次は、手を振る練習をしましょう」

「はい……」

当日は馬車の上から、集まった人々に手を振るのだ。ここでもアステイさんの棒は容赦なく繰り出される。おかげで足だけじゃなく、手も筋肉痛になりそうだった。

その練習から解放され、ようやく終わった……とソファアに座り込んだ私の頭上に、影が差した。見上げると、アステイさんが貼り付けたような黒い笑みを浮かべている。

「まだ終わってないわよ。久しぶりに貴族名鑑の暗唱をしましょう。もちろん、覚えているわよね？」

「……はい」

私は消え入りそうな声で返事をした。実は側妃行列が終わったと同時に気が抜けて、かなり忘れてしまっている。その場しのぎの勉強なんて、所詮そんなものだ。

なんてことを考えていたら、アステイさんの顔つきが恐ろしいものになった。ゴゴゴゴという効果音まで聞こえてくる。

鬼教官のしごきからは当分逃げられそうになかった……

「うわっ！ 肩こりがすごいですよ、アイーダさん」

その晩、私がお風呂に浸かっていたら、エルさんが私の肩を掴んで驚きの声をあげた。

「はい。腕も足も、大変なことになってます……」

私は弱々しく答えた。久々に酷使した筋肉がパンパンに張っている。だからエルさんに肩を揉ん